

東亞醫學

第六號要目

漢方復興への所感
臨牀治験
漢方醫の見た赤痢とその療法
赤白痢と龍牙草
吃逆の療法
蟲機突起の症狀及診斷
七月例会(七月二十二日)豫告

矢數 有道
吉田 一郎
大塚 敬節
石原 保秀
矢數 道明
龍野 一雄

消暑座談の夕

涼しい蠶糸會館にて、諸氏の清談を待つ。
隨筆 大塚 敬節
風の附子のく病氣の話

投稿規定

讀者各位の投稿を歓迎す。
題目、内容は時事、學術、文藝其他隨意。
長さは一〇〇〇字以下とす。

卷頭言

事變二週年と

東亞醫學の希望

七月七日、我々は深き感慨のうちこの日を迎へて、この滿二十年のはげしき戦の裡に、祖国の柱となりたる英靈に對し、心からなる感謝の默禱を捧げたのである。それと共に聖天子の下に進めらるゝ與亜建設の事業の愈重且つ大であることを痛感したのである。

緊張すると共に、國民の健康體位等の問題が一層重大關心を要請しつゝあるは人のよく知る處であつて、國民生活の全般が衛生的に、健康的に規正さるべき理由も多分に此處に存する。

先づ第一に健康なる國民の數一これこそがこの大業達成の第一要素である。如何に健康なる國民の數を増殖するかが朝野内外をあけての緊急關心事であり、この點に寄與出来る學問一特に醫學に於て一のみが眞實のレーゾデールを主張し得る學問である。われ

既に燦然たる戦果を以て皇軍に占領せられたるの地域は我帝國の二倍に及び、この地域に擁する一億七千萬の民衆は、欣然明朗なる歩調を以て、積年の壓制に代る道義善政の光を打建てんとし、その民生の發達する爲に大地資源の開發はもとより、財政經濟産業皆共に新體制へ緒につき防共親日の新東亞文化が創造せられつゝあるのである。われわれは此時期に此國の生をうけ、この大業に翼賛し得るの光榮を思はなければならぬ。

つら／＼考へるに歴史的の大事業たる東亞新秩序の建設はその指導の中樞たるの責任はわれ等日本國民の双肩にかゝつて居るところ然るに内外の情勢は天津租界問題を先頭とする對英北邊滿蒙國境に於けるソ聯の不法行爲等一刻も心を忽せずからざる緊迫裡にあると共に、内に於ても精神的に一層

醫療制度改革問題

(一)

昨年十二月十九日醫藥制度調査會第二特別委員會小委員會に於て衛生局所屬調査會幹事側より提出されたる醫藥機關及び醫藥費に關する改革案は發表以來既に半歳、現醫界各方面を刺戟すること甚しく、特に醫師側の反對氣勢は日に共に加はり、或は幹事案は即ち殺醫案なりと憤慨し、改革案に非ず改悪案なりと罵り、好んで平地に波瀾を捲き起すものなりと迫り、非常時局下總親和の精神に悖つて殊更に相対摩擦を招來し、我が國古來の美風たる開業醫制度を全く破壊するものなりと嘆じ、その聲喧々囂々、中央に於ける日本醫師會を始め、各地の醫師團は結束して反對の旗幟を翻へし、代案の作成を急ぎ、之が撤回を叫んで蹶起した。之に反して民衆の一部と藥業關係者の支持を得て本案は愈々賛否兩論の中心に擔ぎ上げられて終つた。既に知るが如くであるが茲に改めて所謂幹事案なるものを掲げて、醫藥改革問題と我が漢方醫學の立場に就いて讀者の注意を喚起し、諸賢の御高見を承りた

六月三十日附を以て官制の公布を見、翌七月一日より開設された。即ち此の會は厚生大臣を會長とし、醫、藥、齒、社會科學者、代議士、官吏等の代表者を委員に擧げて、諸般の醫藥制度改革を審議すべき機關として誕生し、各方面より注視的であつた。七月廿六日の兩日、始めて厚生省内に第一回總會が開かれ會長木戸厚生大臣より「國民醫藥の現状に鑑み、現行醫藥制度改善の方策如何」の諮問案が提出され、十三氏より成る特別委員が選任された。次いで八月一日の特別委員會に於てその改善要目(一)醫藥の人的要素(二)醫藥(三)藥事(四)豫防並に指導衛生の調査なる四項目に決定した。

第一、「公營醫藥擴充」に關する事項
一、農山漁村に於ける原則的公營制度の採用
二、都市に於ける公營醫藥機關の擴充
第二、一開業醫の管理一に關する事項
一、開業許可制度の實施
二、診療報酬規定の制定
三、醫藥內容の監督強化
四、都市に於ける處方箋發行方法改正
五、醫藥廣告の制限
六、醫師の勤務指定制限の創設
七、平時に於ける徵用制度の實施
八、専門科目の整理、及び専門醫師檢定制度の創設

漢方醫學の分野に於て吾人は之が改善案として如何なる方策を献言し實行すべきか。高議して及ぶ可らざるは專論の功あるに若かずである。吾人は茲に本協會の目的と事業の全面的遂行を著々と實行することによつて可能でありそれはやがて單に醫藥の範圍、制度の限界のみに止まらず、その根本的なるもの、改善が成就することを得るべきである。現在に於ける醫藥制度改革の必要は遠く明治初年の醫師法改正に端を發し、その依つて生じたる雜草が刈り取らるゝものであつて、改革せらるゝものは即ち多く西洋的思想の所産である。此の西洋醫學の不足を補ひ誤謬を匡正せんがために、臨牀的に優れ、綜合的な漢方の興隆を必要とする。吾人は國立漢方研究所の設立と漢方専門科名の認可の要を痛感するものである。

この廣汎な問題に完全な解答を與へ得るものではないが、諸多の學問との協同の一翼を荷ひ得るものであることは從來我々の鮮明にし來つたところであり、更に將來愈此點に貢献する所あらんとするものである。與亜建設第三年にあるたり、われ等は、朝野各界により、我等の主張する所が厚い支持をうけて具體的なる施設として發足するに至らんことを希求してやまないものである。日本そのものへは醫藥の發展性、從來の特にさへば醫界の發展の狭隘性を特

備而九月廿二日第二回の總會に於て會長の發案により、特別委員會設置案が決定し、第一より第三の特別委員會が設けられ、第一委員會は醫藥の人的構成要素に關する問題を擔當し、第二委員會は専ら醫藥制度に關する問題を取扱ひ、第三委員會は藥品並に醫藥材料及び醫藥機械に關する諸問題を分擔審議することになつた。即ち所謂幹事案は第二特別委員會より提出されたのである。以來各特別委員會が屢々開催されて十月四日開

成る程本案が全面的に現實化すれば、從來の自由開業制度は見事に崩壊し、原則的にはその持てる醫師の權能は殆んど剝奪される事となるかに見えざる。この案の是非實現後に招來さるゝ結果についてはこれを暫く論外に置くとし、然し時代はあらゆる方面に現狀維

要を痛感するものである。

漢方復興への所感

矢 數 有 道

(一)

醫學的興味からのみ研究して、これを實地に活用してみやうなどと別段考へてゐない一部の漢方達にとつては、漢方醫學を復興した方がよいかといふことすら疑ひを持つてゐる。無理もない話である。その人達にとつては漢方は骨董的價值だけであつて、現在に活きた學問ではなくなつてゐるからである。

われ／＼の立場はさうでない。この漢方を再び現代に活かさなければならぬ使命を持つてゐる。現代人の病氣を治療することによつて、昔の漢方を現代のものに再現しやうと努力してゐるからである。それだけに骨も折れるし煩悶も湧いてくる。

さて現在の漢方研究家にも二通りがある。従来の洋醫學の一切を放棄して漢方のみで診療してゐる人、すなはち所謂漢方醫といふ部類の人達がある。第二は別段それほどの熱情はないが、西洋醫學の欠を漢方によつて補つてみやうといふやうな立場から、半分は道樂のやうに漢方薬を使ふ人達である。漢方を臨牀的に現代に再現せんとして努力してゐる點は同じで、漢方復興の主要役割はこゝうゆう人達に依頼せねばならぬ。

後者は漢方に対して常に批判的態度であり得るから、漢方に溺れるといふやうな危険はまつない。漢方の中で善いものだけを採用することが出来る。西洋醫學で長所とする病氣まで漢方で下手に治療するといふやうな誤りはしない。

濟心。従て後者は前者のやうな漢方醫の態度を嗤ふことが往々ある。しかしな程後者には上記のやうな長所があるかも知れない。要するにその人達の漢方観は自分の持つてゐる色眼鏡から見た漢方観に過ぎないものではなからうか。

病理學を専攻した博士は西洋病理學の立場から漢方を眺める癖がある。自分が合點できたものだけを承認し、他の部分は用捨なく否定するか或は惜しげもなく捨てしまふ。藥物學者も亦然り、經濟學に堪能な人は漢方の本質を經濟機構から解剖しやうとする。

従てこの人達の理解した漢方が果して漢方の眞髓に觸れてゐるかどうか、それは疑ひなきを得ない自分か解る程度つまらない。漢方だけが採用しない傾向がある。或は單に處方の使用だけに終止して、更に漢方醫學的病理に觸れやうとしないものもある。

(二)

漢方復興の當面の責任者は、なんといつても前者の漢方醫の双肩に背負はねばならぬと思ふ。極端かも知れないが、一度びは漢方を盲信して洋方を捨てる位の氣組みある人でなければ、漢方のほんとうの味は分らぬのではない。漢方をほんとうに味ふには從來持つてゐた種々の色眼鏡を捨てて見る必要がある。ところがさうゆう色眼鏡で漢方を批評する人は却て漢方醫には漢方の眞價は分らないといふ。森の中へ入つてしまつては森は分らない。森を離れて始めて森を指すことが出来るのだ、と尤も

な理窟である。しかし森の中へ一ツべんも入つてみなくては森の内部分るまい。どんな種類の樹木があるか、離れた外側からばかり遠望してゐては分らぬのである。

われ／＼漢方醫の現在に丁度その森の中を彷徨してゐる状態であるかも知れない。漢方といふ森の中にどんな立木があるのか、悉くは調べがつかない。調査は出来てゐても、その内容を體驗し現代に活用し盡してゐないものである。杉ばかりの森であつたら至極簡單であるが、そこには松もあれば檜もあり落葉樹も何十種となく繁つてゐる。

それ等を悉く調査し吟味した上でなければその森を離れることは早い。即ち漢方を批判したり、西洋醫學との融合などを試みるには未だ材料が揃はないのである。

(三)

漢方は現在のまゝ、よろしいかよいと斷言する者は恐らく一人もゐない。漢方の復興が拍車をかけ

興亞工作と漢藥

吉 田 一 郎

興亞聖戰も第二周年記念日を迎へる。空に陸に海に、我が精銳を誇る皇軍將士が苦心の戦果も漸く誤れる反日蔭謀を追て、維新政府の建設と共に東西久遠の繁榮が企劃されてゐる。

此の千載一遇の重大時局に〇〇〇の政策として、支那民族から一日も等閑に附し難い漢方醫學と其の漢藥を、動もすれば除外せんとする情勢であると、或る消息通から聞き及んだ、勿論これは重大な問題であつて單なる一部職業上乃至商業上から超越した一大國策に強固に焼付られてゐる事毎にこ

られ、ばかけられるほど、漢方醫の責任は重くなる漢方の先達者となつて指導の立場にある人は特にその感が深いことと思ふ。

どうゆう漢方を復興しなければならぬか。——これは仲々難しい問題で、決定的なもの言ふことが出来ない。であるが、たとへ西洋醫學との融合の時期が到来する採り入れる方が正しい西洋醫學が生れるだらふことは斷言してもよいと思ふ。西洋醫者が漢方を生贖りするだけの融合には大いした期待はかけられない。

それから將來どうゆう風に漢方といふ森林が解決されてゆくか知れないが、現在の樹木には出来るだけ精細に必要な樹木を多く調べて置くことが、大切であると考えてゐる。——傷寒金匱も、素靈二書も、湯液鍼灸のことも、東西兩醫學の融合とか漢方の批判とかいふ問題は、筆者一人の觀點からすれば、その後の問題であらねばならない。

の國民性を發揮する。この一大潮流を看過した新法令なり新國策を樹立したと假定すれば、其れは根本的な誤謬であり先づ成果を期し得ぬものであらう。

最も好例は、日清戦後後に我が範圍に歸した臺灣に行はれた各般の政策殊に醫藥制度を觀れば這般の事情を明瞭に示すものである。即ち前述の様な支那傳統を無視した日本現行制度(内地の西洋流)を採用して、彼等民間に重用された醫生の治術と其の藥材を追究しつ壓迫した結果は、民衆から甚大な反感を買つたのであつた。勿論迷信的非衛生なそして根據薄弱な醫療行為も介在した所謂玉石混濁なものではあつたが、彼等の強烈な信仰と往々にして奇效を奏し、又常に平癒を來らす其の民族療法の容易さに比較して、殊更に鹿爪らしい新制醫藥に合致せしめやうとした重課は蓋し物心ともに彼等に對する決して策を得たものではなかつた。

次で朝鮮に、近くは滿洲國に此の新法を強制しつゝある。過去の抵抗微弱な彼等は制壓出來たであらう、が來るべき新天地、中華民國四億二千餘萬の大衆に斯くの如き筆法で臨むとしたら、官撫工作の大業も實に百年河清を待つに等しと斷じて極言ではなからうと信ずる。

實際彼國民衆の醫藥に關する信念は現今我國のそれと甚しい差異がある。例ば病氣の場合醫師に診察を受けて、調劑及療法の一式を醫師に委すが我國現在の通常であるが、彼地に於ては醫生の診察と處方箋を受け又は患者自ら方處しに藥房に藥を求め、藥房は又客の面前で調劑するのを通則とする斯くて一般人が藥品に對する知識を心得て其の良否を云々する、從て優良品が通用され價格も相當な高額をも惜まぬ状態である。従て我國朝野の現状を觀ると如何にもこの邊の事情に遠い、感が深い一例を示せば今日(昭和十四年七月二日)の東京朝日新聞第七面(學界餘瀝)なる欄に「漢方・漢藥」と題し小泉丹氏(慶大醫學部教授・醫博)が次の如く述べてゐるので其の全文を採録してゐる。

東亞持久工作。宜撫安民工作。従て現地醫療を以て漢方醫學漢藥處方が問題になつて來るといふこともあつてよきそに思はれる。併しあまりその動きを見ない。

漢藥には貴重なもの、まだ十分知られてゐないものがあるやうな氣がする。そして此の研究に就て、年來私は多くの専門家方とは違つてゐるやうに思ふ者もつてゐる。

生藥から、其の有成分を抽出して、出來れば純粹な形で取り出さうといふのが目標になつてゐるやうである。此の正しい途であることは問題でない。然し其が唯一の途ではあるまいと思ふ。二つ以上の有成分があるが故に效果の大きいものもある。

私は右のことを驅虫藥で感じてゐる。蛔虫に用ひる海人草といふ成分がある。此では三通り位の成分が働いて効果が高いのではないかと思はれる。其の證據には有成分と稱せられるものよりは、自然そのまゝの効果が大きい。

漢藥がかういふ風に研究して貰ひたいと思ふ。實は私も海人草に手をつけたり、特許權が澤山しがついてゐるといふのでやめた。

右の仁の言は總括して觀れば我等の主張と同様であると云へる。最後に中國に於ける藥材(漢藥)が單なる産業貿易上の重要資材に止まらずして、彼國民間に精神的にも樞要な地位を占めてゐる點を指摘して、大に江湖識者の再思三省を促さんとすの意圖を表明する次第である。

赤痢とその療法

大塚敬節

はしがき

筆者が少年の頃、隣村に老漢方... 赤痢の療法に妙を得て有名であつた。大抵は数日間の服薬で赤痢が癒るといふので、赤痢の疑ひのある病人は、皆その漢方醫に治を托した。然るにその漢方醫は赤痢が法定傳染病となり、届出を必要とする法律が制定せられてからも、別に何等の手續きも取らず、消毒も施行せず、一般の腸カタルと同様に取扱つてゐた。その漢方醫にとつては四五日で癒る病氣を大げさに騒ぎ廻るのが可笑しかつたかも知れないが、或る時その醫者は傳染病豫防違反の罪によつて、告發せられ、體刑を課せられ、獄中死亡するといふ運命に逢着した。而してその漢方醫を告發したのは、その隣村に開業してゐた若き西洋醫者であるとの評判が専らであつた。

赤痢の名義

赤痢の名義は、隨の時代の書物である病源候論に始めて現はれ、赤白痢、久痢等の病名と並んで、その症候を記載してゐる。漢方の經方と稱せられる金匱要略には、下利の名稱の下に、他の下痢を主訴とする疾患と共に赤痢の療法を述べてゐる。利は後世になつて瘧を添へて痢となつたのであつて病源候論にも小兒病篇では赤痢を赤利として記載してゐる。又漢方の醫經と稱せられる素問には帶下の病名があつて、この帶下が後世の赤痢に當ると云はれてゐる。江戸時代には赤痢のことは一般に痢病と呼んだ。醫書には痢疾或は単に痢として記載してあるものもあるが、一般民衆は痢病と呼んだ。猶ほついでだから附記して置くが江戸時代の疫痢は、赤痢が廣く傳播した時の名稱であるか若しくは重症の赤痢を指したものである。

症候

赤痢の潜伏期は長短種々であるが、一週間内外のものが多い。而して潜伏期の短いもの程重症になり易い。初發は寒熱、身體倦怠を訴へ、脈は多くは浮數となる。此の時期は未だ赤痢であるか、否か判然しないが、數時間を出でずして腹痛下痢を起し、初の一二期は粘血を混ぜざる軟便或は水瀉便であるが、漸次にして裏急後重を訴へる。裏急後重とは便意を催して剛に上る。裏急後重と粘血のみ張つて大便快利せず僅に粘血のみを泄下し、便器を離れることの出来ない状態を云ふ。而して大便の數は一日十數回から百回にも達することが稀れではない。腹痛は排便に先驅して起り、下腹に絞痛する如き劇痛を訴へる。糞便は稀薄で、如答兒赤痢では便中に血點又は血線を混じた粘液塊が見える。化膿性のものでは便中に膿を混じり、壊死性のものでは多量の血液を含有し、腐肉の如き悪臭を放ち、忽ちにして重篤なる症候を呈するに至る。

療法

赤痢に輕症があり、重症がありまた患者の體質の強弱、年齢の老若、病の新久等に應じて、治法にも亦變化があり、その豫後經過も種々である。幼少の者と老人とは、一般に豫後のわるいものが多く、殊に老人は自覺的の苦痛を訴へることが少いため、輕症と斷じ、思はぬ不覺をとることがある。脈の細數なるは何病でも豫後は重篤であるが、赤痢で、此脈を現すものは最凶である。發病の初期に浮數の脈を呈する者は慎るべきではないが、既に日を経て、衰弱甚しく、脈却つて浮數となる者は豫後不良の徴である。又腹痛甚しく、裏急後重も強く、食慾全く無く、煩熱乾嘔を訴へ、或は頻々吃逆を發し、大便に膿血を混じり、臭穢に甚しいものは悪候である。又赤痢の經過中に頑固な吃逆を發する者は豫後を警戒しなければならぬ。これには吳茱萸湯、甘草乾姜湯の類を撰用して吃逆の止む者は治することが出るが、此等の藥方で效のない者は往々にして難治となる。又手足厥冷して煩燥する者は必死である。大體に於て排膿の度數の多いものは重症で、少いものは輕症であるが、度數の少い者にも險症があつて、一晝夜百回に及ぶ排膿があつても、大便に膿血を混ぜず、食の衰へないものは、必ずしも悪候ではない。一般症候が重篤に見えても、食の進む者は、豫後佳良に赴くものが多いが、又今まで大きかつた脈が還か沈に變ずる時は、病勢の衰へた徴候で豫後はよい。藥方としては次の如きものが多く用ひられる。

- 一、葛根湯(葛根三、〇、麻黃、生姜、大棗各一、五、芍藥、桂枝各一、二、甘草一、〇以上、一回量)
- 二、桂枝加大黃湯(桂枝、大棗、生姜各二、〇、甘草一、〇、芍藥三、〇、大黃〇、五、以上一回量)
- 三、大柴胡湯(柴胡三、〇、半夏生薑各二、〇、黃芩、芍藥、大棗枳實各一、二、大黃〇、五以上一回量)
- 四、黃芩湯及黃芩加半夏生薑湯(黃芩大棗各一、五、甘草、芍藥各一、〇及前方に半夏二、〇、生薑二、〇を加ふ。以上一回量)
- 五、河間芍藥湯(芍藥一、五、當歸黃連一、〇、木香甘草、檳榔各〇、五、大黃〇、五、桂枝〇、五、黃芩一、〇以上一回量)
- 六、白頭翁湯及白頭翁加甘草阿膠湯(白頭翁一、〇、黃連、黃蘗、秦皮各一、五及前方に甘草一、〇、阿膠一、〇を加ふ。以上一回量)
- 七、桃核承氣湯(桃仁二、〇、桂枝一、五、芒硝、大黃各一、〇)
- 八、大黃牡丹皮湯(大黃一、〇、牡丹皮、桃仁、芒硝各二、〇、瓜子三、〇)
- 九、大承氣湯(大黃一、〇、枳實一、五、芒硝一、〇、厚朴三、〇以上一回量)
- 十、桃花湯(赤石脂三、〇、粳米七、〇、乾姜一、〇以上一回量)

赤白痢と龍牙草

石原保秀

警視廳管下に於ける本年の傳染病中、赤痢は殊に激増の傾向を示し、一月以降六月五日迄の統計に據れば、其數七千三百餘名で、之を前年同期に比するに、千百餘名の増加であると云ふ。之では醫事の衛生の普及發達も、聊か心細い話だが、茲には其問題は暫く措く進んで其療法に就て考ふるに、往時は赤痢白痢の如何を問はず、之を痢疾と總稱したものである。

所謂滯下、腸滯、疫痢、噤口痢久痢、熱痢、氣痢、休息痢、寒痢等の如きも、亦其一種であるが、漢醫の多くは、先づ「惡寒脈浮數等の表證ある者には葛根湯、次に黄芩湯加葛根湯の如きを撰用した」

是れ改めて言ふ迄も無い所であるが、私は曾て「陽加答兒の魚膽療法」を題する一小文を書いたことがあつた。諸先輩の言説を引用すると共に、治驗例の面白いものとして、我國朱氏學の泰斗、古賀精里の血便五十三年等を例示したのであつた(漢方と漢藥第一卷第八號及拙著)。

所が其後觸目せる諸家の療法中にも、亦之に裏書せるかの如きものが若干ある。爲に私は、同療法を以て、益々試用の價值ありと信するに至つた者であるが、今其一二を擧げらば、平安後藤家方函には「凡そ痢疾は宜しく疏滯すべし、尤も兜澁を忌む。壯實にして能く食する者は、生鮎魚膽を食するを佳とす」とあり、山本鹿州の稱黃齋談には「予が家は江湖上に在りて、常に漁人の痢疾を療するを見るに、病の淺深、蟲の有無

に拘らず、鮎魚の膽を澤山食し、藥せずして平癒し、愈えて後少し障り無し」とあるが如きが其れである。既述の香川修庵の所説の如きは、無論師家たる後藤家の實験に負ふ所が多いのであらう。

然るに茲には更に一の簡便方がある。それは龍牙草(キンミゾヒキ)單味の煎服であるが、事は載せて多紀菫庭の時讀遺我書續録に在る。讀者の多くは、既に先刻御承知のことであらうが、序でを以て左に之を引用して置く。

「常陸新治郎小野越村の甚五兵衛といふ者、嘗て躰壽館に來つた、家傳治赤白痢方を獻す。其方は靑荳葉俱倒四匁、水三合を以て五勺に煎じ用ひ、大人輕症は日に三貼、重症は晝三、夜一、必ず三五日にして愈ゆ。小兒は日に二貼を用ふ。若し病劇しく熱甚だし者は、甘草五分を加へ、日に五貼を服せしむと、菴荳といへる草をも出せり。檢するにキンミゾヒキなり、此は關山先生の救荒本草に據りて、龍牙草に充てられたる品なり。

其治痢の能あることは、既に本草綱目に見えて云はれ、其根味辛溫無毒、春夏採之洗淨、揀擇去三處頭、焙乾不計二分兩、搗羅爲末、用米飲調服一錢、治赤白痢無所忌と(本草綱目には漏らざり)。又醫分摘要に治赤白下痢龍牙草五錢、陳茶一錢水煎服とあり、綱目にも引きたり。關書南産志にも、龍牙草出三福州治痢最神と云へり。

斯く古今彼我共に治痢の效あるを唱ふれば、げに奇驗も有るべけれども、痢も大病のこなるれども苟も、奇方草藥に安んずることならぬ故、余は試用せざりしが、相識中には施して效を得たる人もありし。更に考ふるに、方書に龍牙草を用ひしは

國醫砥柱誌に答ふ

歸脾湯の運用に就て

矢數道明

先般來貴社御發行の國醫砥柱誌御惠送に接し、有難く有益に拜讀いたして居ります。特に今期號の言論欄に於て汪氏の「中日醫界携手之呼聲」が掲載されたことは非常に嬉しく存じます。次に小生が漢譯日本漢方醫學會發行の漢方漢藥誌上(第四卷第一號)に發表しました「歸脾湯の運用に就て」を貴誌第一卷第三期及び此度の第二期第三四期に、金真如氏が摘譯掲載されたことは小生の光榮に存する所です。前回の轉載文は未だ閲讀して居りませんので若し殘部がありましたら幸甚の至りに存じます。

併而此の度は小生發表の治驗三例が譯録されて居り、漢文獨特の迫力を以て拙稿が翻譯されてゐるのを見てまことに嬉しく覺えました。採録者耿曼衆氏、譯者金真如氏に深く感謝いたして居ります。就ては本號第三子宮出血甚劇の治驗中「血崩血脫甚しきに四物湯用ゆること勿れ、萬物を枯殺す」といふ小生の文章に對し「此語其の義を解せず、上下接し難し」云々と註がありましたので、茲に本誌を通じて御返事に代へやうと思ふのであります。何等の註釋もなく

右の「血崩血脫甚しきに」云々を引用したので譯出に困難をされたことをお詫び申上します。

右の一文は御承知の吳山甫著名醫方考卷三、血證門四物湯條下に「血不足者此方を以て之を調ふときは則ち可なり、若し、上下失血太多、氣息微微の際は則ち四物禁之之を與ふる事勿れ、然る所以の者は四物湯は皆陰、陰は天地閉塞之令、萬物を生ずる所以の者に非ざる也」とあるに依つたものであります。然し乍ら四物湯は御説の如く、「未だ必ずしも萬物を枯殺する藥に非ず」であつて血不足を補ふものであります。その運用に當ては屢々禁忌症に誤り用ひらるゝことがあるのを戒めたものであります。即ち上下出血太多にして氣息微微の場合には禁忌であるといふことは、寒冷性とあるや四物湯は陰藥で、寒冷性の藥が多いから却て益々出血加はり貧血の度を増すと云ふ結果になる様であります。この禁忌適應の鑑別點に就ては、我が邦の津田玄仙著醫治茶談第十卷中、四君子湯治驗の論中に述べられてあります。即ちその意味を要約しますと、

「吳山甫が名醫方考に上下失血太多則必勿與四物湯云々」とあるのは四物湯を用ゆる肝要の心得である世人が四物湯は皆陰の藥なりとて血崩血脫に一樣に此方を用ゆるのは大なる誤りである。これを春夏秋冬に譬へて云へば、四君子湯は春と夏の如く萬物を生ずるが、四物湯は秋と冬の如く萬物を枯らすものである。今血崩血脫の證があつて、四物湯が四君子湯かを定めずには唇の色を目的とせよ、脈よりも大切である。唇の色が先平常と變りなければ、出血如何に烈しくとも四物湯でよいが、唇の色が淡白に見ゆるときは、出血の量は少くとも唇の色が淡白の主たではない。即ち四君子湯を與へるべきで、更に進んで唇色が淡白ならば四君子湯に桂枝或は乾姜を加へ、愈々重なるものは附子を加へなければならぬ」とあります。これは實地の上の目標として貧血の程度を望診にて知る最も簡易にして而も的確な鑑別診斷法であります。歸脾湯は四君子湯の變方であり、その運用には同様な目標を以て投藥されてよいと思はれます。この第三例も芩歸艾膠湯の四物湯類は却て結果が悪く、此方にて奏效したものであります。古人が獨陰生せず孤陽成らず、血脱に氣を益し、氣虛に血を調ふといはれたのは永遠に眞理であります。

この意味で淺田宗伯著醫書影中の治驗を次に要録して見ますと「五十歳許りの男子が先年來大下血を病んで、脱血後肛門腫出して納まらぬ、(中略)診すと面色青慘、唇舌灰白、胸中動悸甚しく腹脹滿、少し勞働すれば氣息喘乏、口中乾燥する。脈は虛數である。一醫が四物湯加減或は補中益氣湯を與へたが治らない。思ふに下血過多のため中焦の氣虛して多に年互つて治せぬのである。古人が血を補ふは氣を補ふに如かずといふたが、宜しく胃氣を輔くべきであるとして六君子湯加厚朴香附

子抱姜を與へ鐵砂丸を兼用し數日にして下血止み、動悸減じ數旬にして愈へた」といふのがあります。小生は嘗て一婦人、元來心臓瓣膜病あり、屢々難産を経過し、胃腸甚だ虛弱にして貧血高度なりしが、四回目的産後血脚氣を發し困難せりと云ふ、近隣に小生が同様の脚氣に四物湯加減の藥方を投じて全治せる者があつたので、その殘りの藥を乞ふて服用せしむるに、腹痛下痢日に數回、食慾全く衰へて益々衰弱せるの報告を受けて往診したことがありました。所謂唇舌灰白、顔色青慘、脈虛弱、腹軟弱依つて直ちに六君子湯に變方して漸々に快癒せる經驗を持つて居ります。脾胃虛弱胃内停水あり、下痢の傾向あるものには概して四物湯は注意を要する様には思はれます。以上不要の箇所、説明の不足の所もあると思ひますが、御解答迄申上げ、向後、中日醫學提携のため御互に盡力したい希望を申述べ次第であります。以上

暑中御見舞

申上します

全東亞の讀者諸氏御健康で御奮闘ですか。東京今年には實に四〇年來の疫病流行で、殊に赤痢の如きは九千餘名に昇るといはいはれ、野菜をクローレル・カルキで消毒すると云ふ戰慄情態であります。此際本誌は大塚氏をわづらはして漢方に於ける赤痢の療法を特輯致しました「預防を嚴重に、治療を速に」といふ今日の緊要事に應じんとしました、何卒諸氏の御活用を祈つてやみません。それから兼て北支に御出征中の山崎忠夫氏からは別項の御通信があり、更に中支に於ける本田精一軍醫中尉より最近長大の論文を頂き來月號の誌上をかざることになつて居ります。御期待下さい。再筆全讀者諸氏暑中御清康

吃逆しやくりの治療法

矢 數 道 明

吃逆の原因

吃逆は學名を間代性横膈膜痙攣といはれてゐる。その原因として現代醫學の論ずる所を見ると、

- 一、横膈膜神經の刺激に因るもの例へば頸部脊髄膜炎、頸椎疾患、肺瘍肋膜炎、心包炎、胸縦隔炎、大動脈瘤が原因で發するもの。
- 二、横膈膜の直接刺激に因るもの例へば横膈膜炎、横膈膜炎。
- 三、反射性に起るもの、例へば消化器、蛔虫、生殖器の刺激によつて發するもの。
- 四、その他、腦及腦膜の疾患、ヒステリー、種々の重病に發するもの、精神感動によるもの等が挙げられてゐる。

吃逆の治療法

右の如き種々の原因があるから一様にはゆかぬこと勿論である。原因が判然としてゐるものにあつては、それに従つて治療方針が定まるものである。一般に精神の轉導によつて之を抑制し得るものであるとして、例へば、一、突然患者の背部を打つて之を驚かしたり、二、間斷なく高聲を放つて數字を算へしめたり、三、聲帯を閉ぢて強く努責せしめ、又咳嗽或は嘔吐せしめたり、四、刀刃を凝視せしめたり、五、氷水を一氣に嚥下せしめたり、六、耳若くは鼻粘膜を刺激するなどいろ／＼と手を換へ品へかへて氣分を轉換することに由つて屢々效があることとされてゐる。

又横膈膜部に強い皮膚刺激を興へ(芥子泥、感傳電氣)或は頭部に指壓を加へ、又患者の頭部を俯屈せしめ、胸廓下部を五分乃至十分間その周圍より壓迫する方法など様々である。或る人は患者に一皿の食鹽を指を以て徐々これをなめさせて百發百中なりと云ひ、鹽より砂糖の方がよいなど云ふ議論も出てゐる。脊髄や頸推の疾患、大動脈瘤やその他腫瘍に原因するものなどは中々治療困難とされてゐる。

漢方醫學的治療法

漢方では吃逆を噦といふ病名を以て論じてゐる。噦にも陰陽虛實があつて、その治療方法は一樣ではない。大體の病理を、一、食毒が腸胃に停滞して來るもの、二、氣の上逆によるもの、三、熱性或は寒性的の毒によるもの、に分ける。

有持桂里先生の校正方輿輿には、古來噦は大抵の場合胃中の寒冷によるもの(即ち大動脈瘤とかその他の腫瘍によるもの等)を指すものもある。又蛔蟲に因るもの、積聚の他の腫瘍によるもの(即ち胃内停水、痰飲によるもの)等が皆この原因となり得るもので、一時的なものも氣分轉換のまじなひでも癒るが、他に重大な病があつて發したものは未だ凶と斷じてゐる。方輿輿所載の治療は各方面に互り詳細に述べてある。その處方だけを記載して運用の目標は同書に就て研究されてゐる。即ち陰陽虛實に従つて次の如き方法を用ひるのである。

- 一、橘皮竹茹湯、噦一通りの瘵
- 二、橘皮湯、氣逆によるもの
- 三、半夏瀉心湯、心下痞鞭するもの
- 四、吳茱萸湯、陰虛症水毒寒によるもの
- 五、柿蒂湯、以上の藥で止まぬもの
- 六、甘草乾姜湯、苦味劑で效かぬもの
- 七、炙甘草湯、噦して脈結代のもの
- 八、附子梗米湯、胃中の寒甚しきもの
- 九、四逆湯、吐瀉の後手足冷え脈細のもの
- 十、猪膽汁湯、呼吸も止まる程の烈しいもの
- 十一、紫蘇散、ふいこのぶが奇效あることあり
- 十二、刀豆、燒いて黒くし末として服す、奇效あり
- 十三、灸法、氣海、期門、關元、腎俞

治験の一例

私は先達次の如き一例に見事に奏效して感謝されたことがあるので参考のために報告して見やう。

三十四歳の、常に胃腸虛弱で、下痢し易く、全體が弛緩性體質の男子である。前に淋疾に罹り、時々下腹が張つたり、小便の濁濁することがある。本病は二日前から初まり、連續する吃逆の發作に寢食も廢するばかりで、見るからにげつそりと衰へてゐる。患者は發病の前日にスキーから歸つて來たばかりであるといふ。腹は軟かた脈は頗る弱い。舌苔は少しく白く、その他には大して苦痛はない。大便も小便も著しい變化なしである。私はとにかく目の前で止めてやらねばと、先づ試みに例の食鹽療法をやつたが約三十分、患者は命の如く、指頭についた鹽を克明に嘗めたが發作は一向に止まぬ。中腹水分が極度に充てられて、擧上十分、横膈膜を壓迫したり、擧上したり(これで數年前效があつたことがある。これは膈膜下の鬱熱

によるものによかつた)して一時間以上無効のまま過ぎ、夜更けるに隨つて發作は益々猛烈になつて行く、愈々藥をとて急ぎ煎じたのが次の處方である。

方名 丁香柿蒂湯(萬病回春)

丁香、柿蒂、良姜、桂枝、半夏、陳皮、木香、沈香、茴香、藿香、厚朴、生薑、砂仁各〇、八、甘草、乳香各〇、四(各瓦一回量)

主治に曰く、胃口虛寒、手足冷脈沈細、是れ寒吃なり此方之を主ると。

この方を煎じ上つて、一口服用し初めるとそれきり服み終つてピタリと止んで終つた。神效とは正に斯くの如きものであらう。斯くも速に效くとは豫期しなかつた程である。語ることも三十分ばかりしたが完全に止んだ。患者は勇躍して歸つた。

嘗て漢方と漢藥誌上で、本協會々員(目下南支派遣軍々醫として活躍中)大村久雄氏が貴族院議員の某博士が某病院に入院吃逆止まざることを數日、手の施し様のないのに次の如き處方を與へて大效を擧げ名聲を拍したことがある。これは胃中胸膈の鬱熱によるものを用ひられるものである。

處方 加減小柴胡湯(萬病回春)

柴胡、黃芩、梔子、柿蒂、陳皮、砂仁、半夏、竹茹、各一、〇、藿香、茴香各〇、五、沈香、木香、甘草各〇、三、烏梅、生薑各〇、(各瓦一回量)

右の如く吃逆を治する藥方に、沈香、木香、丁香、藿香茴香等香氣の強い而も温性のものが加味されるのは、これ等の藥は氣を順らし發散するもので、よく鬱氣を散し、寒冷を去り、水毒を除くものである。しやくりの全部が右の處方で效くといふ譯ではないが、よく柿蒂一味だけを頻りに吃逆が助かつたといふことを聞くから、乾柿が手に入つたら必ずその蒂へたを保存して置くがよい。

東 亞 醫 學 協 會 指 定

和漢藥專門

高島堂藥局

東京市本郷區本郷五ノ五
電話小石川一六五七番
振替東京二五九五三番

和漢藥專門

紀伊國屋藥店

東京市神田區花房町二
電話下谷五〇七番
振替東京三〇八〇五番

和漢藥專門

小島七五郎

小石川區原町十二

江州屋藥局

藥劑師 吉田 一 郎
埼玉縣深谷町本町
電話深谷三二一六番
振替東京八一四一五番

和漢藥種問屋

植木萬策商店

振替東京二八二一一番
振替大阪一五二〇二番
振替小樽一四六二番
神奈川縣二宮區内井之口

蟲様突起炎の症状及び診断

龍野一雄

我

々々は蟲様突起炎患者を診察するに當つて

- 一、蟲様突起炎なりや否や(病名診断)
- 二、如何なる器質的變化を起してゐるか(病理解剖學的診斷)
- 三、漢方の立場より觀て何湯の證か。

の三つの方面から觀察しなければならぬ。(一)(二)は二重生活のやうになるけれど現在の我々にとつてはどれも皆不可缺である蟲様突起炎に際して現はれる症状は随分詳細に觀察されてゐて例へば右腋窩の體温が左側より高いとか(Widener氏症狀)肛門より空氣を送入すると廻胃部が痛むとか(Brescho氏症狀)慢性症には右腋孔が散大するとか(Buchmann氏症狀)いろいろあるけれども、それ等は必發の症状でもなく、又その症狀が蟲様突起炎の診斷又は治療にとつて不可缺といふ譯でもない。たゞ何故腋孔に變化が來るかといふ機序に學術的な興味を覺えるに過ぎないのである。

本

稿に於てはたゞ前記の三要點へ求心的、集中的に進んで行くために必要な症狀のみを取扱ひたいと思ふ。

蟲様突起炎の臨牀上の分類は様々な據點から成されてゐる。例へば時期の上からは、

- 一、急性、慢性、起炎
- 二、慢性、蟲様突起炎

とされてゐるが、これは稀に病理解剖學的變化と平行しない場合はあるにもせよ通常行はれてゐる分類である。初發より三日以上を経過して猶急性性狀のあるものを中間期といひ、急性性狀なきものを慢性期と呼ぶこともある。又初發性と再發性を分ることも豫後の判定、治療上の參考になる場合が多い。例へば初發期には比較的輕症で済むものは再發時には比較的重症で済むことがある(蟲様突起腫脹の破壊により化膿性機轉が擴大し難い)再發性のもは摘出手術が困難なことが屢ある(主として癒着のため)又合併症の有無によつて急性期を

類である。初發より三日以上を経過して猶急性性狀のあるものを中間期といひ、急性性狀なきものを慢性期と呼ぶこともある。又初發性と再發性を分ることも豫後の判定、治療上の參考になる場合が多い。例へば初發期には比較的輕症で済むものは再發時には比較的重症で済むことがある(蟲様突起腫脹の破壊により化膿性機轉が擴大し難い)再發性のもは摘出手術が困難なことが屢ある(主として癒着のため)又合併症の有無によつて急性期を

一、單純性、蟲様突起炎
二、急性、慢性、起炎を併發せる蟲様突起炎

三、膿瘍形成を伴へる蟲様突起炎
に細別するの臨牀上の便宜が大きい。

は病理解剖學的變化を主としたのみならず治療上にも手術的機轉の選擇に關係する。

又稀には病理解剖學的變化を主として急性型を輕症、中等重症、重症の三つに分類することもあるが根據の表示が不明瞭であるのと移行型が多くて餘り實用的ではない。

比較的特長のある経過をとる所から老人期、小兒期、妊娠時を特別として取扱ふのは妥當である。以上の分類は臨牀上皆必要である。實際に初發性急性で限局性腹膜炎を合併して居り、中等重症

で妊娠中だといふやうに觀て行くのが至當である。但し此等の分類は皆悉く本稿冒頭に述べたる三つの間に對する答への一部として意義を生じて來る。

(疼痛現象)本病に罹患せることを自覺するのは殆ど例外なく腹痛の疾患による腹痛とを悉知することが必要になつて來る。

蟲様突起炎の場合の腹痛は成程よく記載されし如く、最初から必ずしも廻胃部に限らず、反つて約三分の一は最初胃部に起り、他の約三分の一は臍部、下腹部全體、左下腹部、腹部全體に起る。然しいづれにせよ三四時間乃至半日後には廻胃部に局限して來るのが、常だが廻胃部に限局して來るの診斷はむづかしい、暫く経過を觀察しなければならぬ場合が多い。但し漢方では斯かる時期と雖も柴胡桂枝湯の證として握んで行けるから合理的である。

疼痛の程度は個人の忍耐力によつて違ひ、病變の程度によつても違ふが、普通の腸カタルなどの疼痛は一箇の鎮痛劑注射で止まるに反し、蟲様突起炎の疼痛は大抵一箇では止まりきれずに數十分乃至一二時間後又激痛を訴へて來るのがむしろ特徴である。即ち何か進行性の病變が潜んでゐることを豫知せねばならぬ。疼痛は警戒信號なりと云はれてゐるの思出すべきだ。然し場合によつては、殊に老人などでは病理解剖學的變化が著明であるに拘らずさほど劇痛を訴へぬこともあるから、腹痛の程度を唯一の規標となし難い。

壓痛點として記載されたものは頗る多く、代表的なものを擧げると

- 一、仰臥位に於ける廻胃部壓痛點
Burney 臍と右臍骨前上棘とを結ぶ線上に於て同棘より二インチ距つた所
- 二、モンロー氏點 Monrow 右の結合線と右直腹筋外縁との交點
- 三、ランツ氏點 Lanz 左右臍骨前上棘の結合線と右三分の一と左三分の二の境界點
- 四、ゾンネンブルグ氏點 Sonnenburg 左右臍骨前上棘を結ぶ線と右直腹筋外縁との交點
- 五、ラップ氏の四角形 Rosenblum 恥骨縫際、右臍骨前上棘を結ぶ線及び臍よりの右水平線、右臍骨前上棘よりの側腹線により圍まれた四角形内に壓痛點を證すに幅をもたせて置いた方が實際に則してしまつても甚しく不都合ではない。ラップ氏四角形の外方に於て壓痛點を認めた場合には先づ他の疾患を考へるべきだ。

注意すべきは右總腸骨窩動靜脈に沿つて壓痛は婦人の附屬器炎、月經障礙、痔、等の場合、時には腸カタルでも起り得るもので屢々蟲様突起炎と誤診せられることがある。蟲様突起炎との區別は動脈搏動の有無、筋性防禦、左側總腸骨窩動脈の脈痛有無其他蟲様突起炎の特徵的症狀を吟味してかゝれば誤ることはない。

痛のある箇所を發見するの少し熟練すれば造作のなない事で、觸診する手には出來るだけ力を入れず(力を入れたら必要があれば反對側の手を以て觸診する手の上から壓を加へるがよい)軽く觸れて行くに抵抗のある箇所を感じる。そこを少し強く、殊に一指頭を以て壓すと明確に疼痛を訴へることが多い。硬結を觸知したら、その大き、方向、硬さ

グリの有無、周圍との關係等を充分よく察知すべきである。

ロ、廻胃部に於て壓し方を變へるは患者の體位を變換することに於て證明せられる疼痛現象

一、ブルンベルヒ氏症狀 Brunenberg 廻胃部を徐々に深く壓し急に手を離すときに疼痛を訴ふ。これは腹膜炎を疑はしめるに充分である。

二、ローゼンスタイン氏症狀 Rosenstein 左側臥位にてマックバーネー氏點を壓すと疼痛が著明になる。

ハ、介達刺戟によつて起る廻胃部疼痛

一、ロブシグ氏症狀 Rosshig 下行結腸を上行性に壓上げると大腸内の瓦斯が盲腸に逆し同部を壓迫して疼痛を訴へしむ。バスタード氏症狀は同じ原理を以て肛門から空氣を大腸内に送入するのである。

二、テン・ホルン氏症狀 Ten Horn 右精系(女なら圓靱帶)を牽引すると廻胃部に疼痛を訴ふ。

其他右脚の運動に際し、又右股動脈の強壓に際し廻胃部に疼痛を訴ふる等の症狀が報告されては居るが診斷上の價值といふよりむしろ症候論として興味がある。

現象として認められる筋性防禦は蟲様突起炎の診斷のみならず治療の指示からも重要な症狀である。診察腹の方法は壁を極く軽く觸診し且つ必ず先づ左下腹部を觸診して健康部位の緊張程度を知つて置き次に右下腹部に及びその緊張を檢するやうにせねばならぬ。筋性防禦の廣さは手掌大位からラップ氏四角全體に互ることもあり、時にはそれを越えて左下腹部、右季肋下部に及ぶこともある。さう云ふ場合も多く、限局性腹膜炎を起してゐる時、蟲様突起周囲に滲出液のある場合には深部の模様が疼痛のためはつきり觸知し難く反つて筋性防禦だけ著明のことがある。但し筋性防禦も必發ではなくて單純性蟲様突起炎の場合には證明し得ぬ場合もあるから、是を唯一の根據の如く考へ過大に評價してはいけない。たゞ筋性防禦が輕度な場合には診者の熟練如何により甲は認めるといひ乙は認めないといふやうな差違を生じ易いものであから、最近慶大外生科では硬度計を作ら數字的に測定しやうと試みた。

蟲様突起炎に際して起る疼痛の本態の解釋に就ては未だ確定した説がない。つまり如何なる經路によりどの神經組織が刺戟されるから明瞭でない。

(三頁ヨリ)

口内が粘るとか口が苦いと云ふ症状があれば、此方を用ひてはならない。

十一、桂枝人蔘湯(桂枝二、〇、甘草、求、人蔘各一、五、乾姜一、〇、以上一回量)

初起に水瀉下痢が四五行あつてから、後重となり、惡寒が強く、脈が緊であれば此方を用ひてよい。惡寒も去り後重も緩むものである。十二、眞武湯(茯苓二、〇、芍藥生、求各一、五、附子〇、三以上一回量)

腹痛を覺え、便器にかからんとすれば忽ち失禁し、手足微冷、脈弱のものは此方を用ふ。又日久し不利するにも用ふ。

江戶時代に赤痢の治療を専門に取扱つた書物として、治痢功靈(伊藤維恭著)治痢經驗(加藤謙齋著)治痢軌範(犬島定香著)痢病論(中西元瑞著)治痢便(木幡貞隆著)痢疾瑣言(華岡青洲著)等がある。

附記

江戶時代に赤痢の治療を専門に取扱つた書物として、治痢功靈(伊藤維恭著)治痢經驗(加藤謙齋著)治痢軌範(犬島定香著)痢病論(中西元瑞著)治痢便(木幡貞隆著)痢疾瑣言(華岡青洲著)等がある。

江戶時代に赤痢の治療を専門に取扱つた書物として、治痢功靈(伊藤維恭著)治痢經驗(加藤謙齋著)治痢軌範(犬島定香著)痢病論(中西元瑞著)治痢便(木幡貞隆著)痢疾瑣言(華岡青洲著)等がある。

江戶時代に赤痢の治療を専門に取扱つた書物として、治痢功靈(伊藤維恭著)治痢經驗(加藤謙齋著)治痢軌範(犬島定香著)痢病論(中西元瑞著)治痢便(木幡貞隆著)痢疾瑣言(華岡青洲著)等がある。

江戶時代に赤痢の治療を専門に取扱つた書物として、治痢功靈(伊藤維恭著)治痢經驗(加藤謙齋著)治痢軌範(犬島定香著)痢病論(中西元瑞著)治痢便(木幡貞隆著)痢疾瑣言(華岡青洲著)等がある。

東亞醫學協會七月例会

日 時 七月二十二日(土曜日)午後六時半より
 場所 丸の内蠶絲會館日本間(省線有樂町、市電日比谷下車)
 会場費 參拾錢當日御持參を乞ふ

七月例会は涼しい蠶絲會館にて

清暑座談の夕

會員諸君に意見を聴くの會

今迄随分堅い話をばかりでしたが、この暑さでもあるし、悠つくり膝を交へて、會員の皆様から協会の事業に對し、漢方醫學の飛躍に關しその他治療法、成功談失敗談感想等與に任せて語り合はふといふものです。如何なる話しが湧き出すか振つて御來場下さい。暑氣に負けぬ秘法傳授致します。講師一同出席又大陸視察の取つて置きの土産談などを小柳氏や吉田氏などにお願致します。

六月の學會展望

○六月二十日(火曜日)午後七時より、小石川表町傳道會館にて、偕行學苑同窓會例會開催、當日の講演次の如し。
 一、婦人病に用ゆる藥方に就て (第六講) 龜田 貞氏
 二、市場の漢藥を語る 紀の國屋 土田 梅吉氏
 ○六月二十一日(水曜日)午後六時より東京帝大醫學部生理學教室に於て、日本醫學研究會例會當日の講演次の如し。
 一、入澤齋莊と馬杉景外 安西 安周氏
 二、傷寒論研究 木村 長久氏
 三、鍼灸講義 柳谷 素靈氏
 ○六月二十二日(木曜日)午後七時より拓殖大學講堂に於て、東亞醫

學協會例會開催、當日の講演次の如し。
 一、素問を如何に活用すべきか 矢數 有道氏
 二、村井琴山先生とその治術 大塚 敬節氏
 ○田中吉左衛門氏は左の要領により漢方集論會を持たれた。即ち傷寒論の理論及び應用の研究を目的として、久しぶりに御參會を願ひまして大體次の様なテーマを中心として御批判を願つて見たいと思ひます。云々。

一、腎盂炎、敗血症の豫防並に治療供試品を準備す
 原文の解釋並に其臨床事實(不全)と其治療
 一、多發性漿液膜炎と結核病防止
 一、感冒を中心として見たる個性醫學的治療
 一、會期(七月六日(木曜日)午後六時)
 一、會場(松本樓(日比谷公園内)電話銀座五二二番)

大陸だより

その一 上海より

諸君益々御清榮の段奉賀上候。陳者度々東亞醫學御惠贈段御厚情の程厚く御禮申上げ候。小生

支那要人中より最も吾國體を理解し亞細亞の文化は世界に冠たるものと主張せる本年六十三歳、日露戰爭當時露清銀行濶支店に在職せる龐宏省先生を發見致し候。龐先生は吾が維新政府教育部に推薦申し上げ「野邊君が陰となり陽となり吾等の政府を援助すれば終生奉仕すれども」間の命令は絶對に服せず」と申し居り候。先月テロ事件に連座し生命風前の燈となりし時小生の名刺一葉に依つて助かり龐一門は言ふに及ばず、又政府要人感謝致し候。之れも小生日出づる國の有難味を支那民族に直接親しめる結果に御座候。「龐先生曰はく、西曆一九二三年東京成城學校へ醫學書四四卷寄贈致し居り候間各位御研究の上醫學界に御發表被下度候、又四四卷中には現在支那には得難き珍書もあるとの事にて御研究被下候はば國家の爲に慶賀すべきことと御座候。今回東洋醫學と西洋醫學の優劣の一例を申すれば本年三月申支那定縣下に於いて日本京都〇〇大學醫學士兼縣立病院に招聘せしが設備と人情を知らざる爲め立腹して歸りし不忠の醫學士あり、是西洋醫學の中毒にして其の後支那醫學士を招聘せしが村人慈父の如く慕ひ、又吾等特務機關の面目を立て候斯る如く現地に於いて西洋醫學出の日本人は大いに此の點を老ふる可き事に候。

金拾圓也

本誌購讀料納入者芳名

- 一、金壹圓貳拾錢宛
 東京 金 萬 弘氏
 同 佐々木精一氏
 同 江川 信夫氏
 同 田畑 明順氏
 同 勝浦 千鶴氏
 同 西 綾子氏
 同 原田 菊野氏
 同 阿久津彌七氏
 同 新田 順久氏
 同 田中 勇氏
 同 横濱 宮腰仙太郎氏
 同 大阪 高江洲康幸氏
 同 沖繩 山崎 英忠氏
 同 北支

紹介

漢方と漢藥 (六月號)

- 大陸醫學紹介號内容
 一、大陸醫學序説 龍野 一雄
 一、傷寒論の成立に關する一考察 大塚 敬節
 一、金元李朱醫學に就て 矢數 有道
 一、大陸と日本に於ける鍼灸の變遷 柳谷 素靈
 一、漢方の認識 田中吉左衛門

野邊 清
 東洋醫學協會御中
 その二 北支より
 拜啓 綠意々深く候處益々御發展の段御喜び申上候。當地もいよ／＼炎熱下に行動いたすことと相成り、益々防疫に努力を要する次第に御座候。さて東亞醫學會々御

本協會寄附者芳名

東京 大塚 敬節氏

添附下され眞に有難く拜讀いたし居り候。(中略)先日購讀料御送金申上候間御受取下さり度候。年末筆遠く北支の地に於て御一同様の御健康を祈り上げ奉り候。草々
 阿南部隊大橋部隊
 藥劑師 山崎 英忠
 (山崎氏は拓大講座第一回終了者)

東亞醫學協會

役員

- 顧問 青山 楚一
 同 荒井 金造
 同 千倉 武夫
 同 猪野毛利榮
 同 石原 保秀
 同 大塚 敬節
 同 龍野 一雄
 同 矢數 有道
 同 矢數 有道
 同 柳谷 素靈
 同 清水藤太郎

各部役員

- 一、圖書部 石原 保秀
 同 池田 千壽
 同 西山 一雄
 同 大塚 敬節
 同 相澤 一雄
 同 小柳 賢一
 同 龍野 一雄
 同 小川 春雄
 同 内田 庄治
 同 矢數 有道
 同 大澤 直成
 同 氣賀 林一
 同 矢數 有道
 同 龜田 貞
 同 吉田 一郎
 同 柳谷 素靈
 同 西澤 生惠
 同 戸部宗七郎
 同 木村 長久
 同 中村 高次
 同 藤井次郎作
 同 清水藤太郎
 同 龜岡 晋
 同 阿久津彌七
 同 吉田 一郎

風の字の附く病氣の話

大塚 敬節

その形状によつて名づけたものである。故に乳岩の如き容易に見

乳岩と名づけたが、胃癌の如きものは之を外から望見してその形状

を知ることが出来なかつたから、膈噎とか積聚とか、稱した。膈噎

とは食物がのどに詰まつて下らずに吐くその形状によつて命名した

のである。子宮癌が帯下なる病名の下に包括せられてゐたのも亦右

と同じ理由である。形状によつて岩と名づけた彼等は、癌の末期を

巖花瘡と呼んで、岩と區別したが、病氣は同じもので、その時期によつて、形状が異なるから、病名も別個のものとなつたまでである。

(三) さて傷寒論には中風の他に、風温といふ病氣を擧げてゐるに過ぎないが、金匱要略には、風の字の病氣を傷寒とし、之れに對して軽い良性の感冒の如き病氣を中風としたものである。傷寒は寒に傷らるるの意味で風の中つて病むものより重篤である。

漢方醫學の病名は、之を大別すると、病氣の形状によつて名づけたものと、原因(古人が原因と考へたもの)によつて名づけたものと、この兩者の混合よりなるものと、この三つに大別することが出来る。風の元來病氣の原因と考へられた病氣が、後世になつては、遊走したり、移動したりする形状をも、風の字で現はすこととなつた

その形状によつて名づけたものである。故に乳岩の如き容易に見

乳岩と名づけたが、胃癌の如きものは之を外から望見してその形状

を知ることが出来なかつたから、膈噎とか積聚とか、稱した。膈噎

とは食物がのどに詰まつて下らずに吐くその形状によつて命名した

のである。子宮癌が帯下なる病名の下に包括せられてゐたのも亦右

と同じ理由である。形状によつて岩と名づけた彼等は、癌の末期を

巖花瘡と呼んで、岩と區別したが、病氣は同じもので、その時期によつて、形状が異なるから、病名も別個のものとなつたまでである。

(二) 瘡の如きものは元來岩であつて

持前の濕即ち水毒と一緒に結び合つて、病氣の原因となること及び風と濕とが一緒になつて起つた病氣例へば急性關節ロイマチスの如きものを示したもので、急性關節ロイマチスを原因的に命名すれば、風濕とか濕痺とか呼ぶべきであるが、形状から名づけたと、歴節風であり、痛風である。

(四) 風の字の附いた病氣は小生の調べたところだけでも、二百に近いそれ等の中には病名とは思へない奇妙なものも随分ある。例へば落架風といふ病氣がある。何のこともだらうと思つて調べてみると、下頸骨の脱臼のことだ。癩病を癩風と呼び、インキン、タムシを癩癧風と名づけた愛慾の亢進症を花風と稱するののは頗る藝術的であるが、水風、衝風、膈風、齊風、柔風、王風、刺風、秦風、侵風、陳風、乘枕風、幽風、糾風、曹風、寄風、魏風、暗風、檜風、裙風、唐裙、緩風、偏風、鳥風、野風、温風、凍風、偏風、鄰風等々と、並べてみると、どれが病名で、どれが詩經の中の編名だが區別がつかぬ。

衛風、齊風、王風、秦風、陳風、幽風、曹風、魏風、檜風、唐風、邶風、鄘風、鄭風、詩經の編名で、その他が病氣の名稱であると説明されても、直ぐには辨別に困る程である。

又グロテスクな病名としては、猪頭風、雷頭風、白虎歷節風、狐疝風、膿腿風等がある。

支那は文字の國だと云はれてゐるが、こんなに無暗と病名を製造されては、覺える方が大變だ同じ病氣に二十も三十も別の名のあるものがある。五つや六つの異名のあるものはザラにある。支那醫學研究上の障礙はこんなところにもある。

支那大陸のやうに茫々として、まとまりのない支那醫學、此の支

那醫學を整理し、節約化し、今日

の用に役立つ様に改革することは

われわれに課せられた仕事である

の講演をなした。

六月五日(月)、日本歴史學會に

て東邦醫學社東京支部の竹山晋一

郎氏が「明治初年に於ける漢方醫

學の衰亡とその經濟史的考察」な

る講演をなした。

六月三十日(金)借行學苑同窓會

に於ては本月の補導會を矢數道明氏宅に於て開催、會するもの十二名、お互に胸襟を開いて研究質疑を交換した。

メモ

六月二十五日(日)日比谷松本楼に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

理事大塚敬節氏は醫事公論一四〇四號(六月二十四日發行)に「漢方醫術を語る」を發表す。

理事木村長久氏は日本醫事新八七六號(六月二十四日發行)に「漢方醫術の發達」と題して時評を發表す。

國醫砥柱誌第二卷第三四期、胃腸病特輯漢和醫藥欄に理事矢數道明氏の「歸脾湯の運用」(漢方と漢藥所載)を金眞如氏が之を漢譯して採録してゐる。

國醫砥柱誌はその巻頭に「中日醫界提携の呼稱」と題して汪士瀛氏の論説を發表した。

艸藥新聞(大阪藥業新聞附設)一四二號六月五日發行に「伊東直治氏の眼科漢方病名と眼科漢方藥に就て」の論文あり。

中醫藥專刊の寄贈を受く。同誌は上海呂宋路七十八號、及上海姚主教路安邸に中醫藥院を經營せ、日録々秦伯未氏の機關紙であるが、目錄によれば數十名の中醫諸氏が執筆してゐる。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

新刊紹介

覆刻 癩疽神祕灸經

十四經につきて癩疽の灸法を詳述せる本書は元鶴溪、胡元慶の著する所であり、顔るの稀本として大いに珍重され来たものである。今同醫道の日本社では、山田素参氏の苦心推蔵にたる和譯註解を以て覆刻刊行された。古雅なる表装を施せる本書は、印刷又鮮明であつて、珍玩味讀するに便、しかも價も金帯圓といふ犠牲的廉價である。敢へて推奨する所以である。(東京市向島區寺島町一ノ十醫道)の日本社發行振替東京一六三五四(一番)

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

毎月編輯時になると大塚先生と額を合せて困つたり笑つたりします。そしてこの間に私は名醫といはれる程の人間の大きさに接することが出来る。私はそれを自分の持つ一つの幸福に數へてゐる。

今月編輯案餘談を御紹介致します。漢方を再建するといふことは、新しいそして今日迄成長した日本の文化の上につくられて行つて、丸薬の様なものであると思ひます。この丸薬はその素材を皮那にとりまします。そして、細い粉末にくだいた粉を日本丸薬でまといまします。そして、大塚先生は云はれます。そして、机の上には、支那の歴史と文化に関する研究資料が一日／＼と積まれて行きます。

大塚先生は七月二十五日より京都府立醫大に於ける夏期講習會にて一予が日常藥用する處方と其解説一なる講演をなされまします。關西方面の會員諸氏に謹告致します。

今月より例會は日比谷の醫藥會館で致します。同所は冷房裝置完備、然かも高層の階上に寄疊の上になつて一夕ゆつくりと研究が出来やうといふ仕組です。お忘れなき様御出席下さい。

東亞醫學協會指定藥店は前號發表の通り第一回分八商店を發表致しました。尙詮衡交渉中の方も御座います。私共としては全日鮮滿支の全部にわたる度考へてあります。一層讀者諸氏の御協力も希望致します。なほ内規もありますので御照會に對しては御通知申上ます。(七、六、K)

編輯後記

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。

六月二十五日清水先生の壯行會に於て、東亞醫學協會理事會を兼ねて理事清水藤太郎氏の壯行會を開き、その意義ある出發を激勵した。